

次代を担う子どもたちを

— オンライン視察

厚生文教委員会では、学力向上のための有効な施策と、コロナ禍における学校・地域・家庭の役割の在り方について、調査研究を進めてきました。

今回、1月20日に先進的な取り組みをしている長崎県佐世保市の視察を、また、23日には公募で参加いただいた町民の方々との会議をいずれもオンラインで行いました。

出席者 森 亘、小川 龍美、小山 典男、村山 正利、山崎 栄、香取 幸子

1/20 管外視察 — 長崎県 佐世保市 —

佐世保市は、平成18年に「子ども育成条例」を全国に先駆けて作り、行政・学校・家庭・地域・企業の役割と責任を明確化し、市全体で子どもたちの健全育成に取り組んでいることから、約2時間に渡り実現に向けたプロセスや成果や課題について伺いました。



Q：条例ができて、どのような取り組みをして成果がありましたか。

A：子どもの育成については保健福祉の一部として位置付けられていましたが、「子ども未来部」を新設し独立させました。各部署が縦割りにならないように、子どもを施策の中心に置くことで、条例の理念を共有させています。そのため、市の各種計画には子どもへの配慮が含まれています。

Q：出生率が1.71と全国平均（1.34）を上回っていますが、条例制定と関連性がありますか。

A：アンケート調査では子育ての満足度が高いです。相関関係はあると思います。

Q：子どもたちの自己肯定感はどうですか。

A：自己肯定感が小学生（86.7%）中学生（78.8%）とも全国平均を約2～3ポイント上回っています。

Q：家庭、地域、企業への啓発は。

A：「子ども未来部」と教育委員会が協力して、子どもの接し方についての講演会を実施しています。地域や企業にはチラシや訪問などで啓発し、特に、企業へは育児に協力的な上司を「育ボス」として認定しています。

元気に健やかに育むために

・ 会議を実施 —

1/23 みずほ まちなか会議



町の皆さまの声を直接伺って政策に反映させる「みずほ まちなか会議」をオンラインで実施しました。公募によって参加された方は8名で、2班に分けてそれぞれ意見交換を行いました。

テーマ

みんなで話そう
コロナ禍における学校・
地域・家庭の役割について

- ①家庭教育と学力向上について
- ②学力向上と自己肯定感について



参加者からの主な意見

コロナ感染で子どもたちの活動の場が少なくなっている。子どもたちの活躍の場を行政や地域でもっとつくりたい。人の役に立つことで自己肯定感は高まると思う。

親の子育ての意識を高める必要があるが、忙しくてPTA行事に出られない。保護者が参加しやすいように時間帯を遅くしてはどうか。

学力向上だけを目指すのではなく、生き抜く力、生活の知識を身に付けることが大事。そのためには、日頃から地域の大人たちと関わりを持てるようする。

子どもたちが自らプロデュースして活動できる施設が町内にできた。利用している子どもたちは自己肯定感が高まっていると思う。

自己肯定感は幼い時の親の接し方の影響が大きいので、町の事業メニューに入れられないか。

親が子どもに関心を持っていないか、家庭に子どもの居場所がない子がいる。周りの大人がサポートし、子どもが話せる環境や子どもの居場所をつくる。

子どもの居場所が必要。幼児の予算を振り分けて地区会館などに人を配置できないか。

進学やテストのための勉強になっていないか。学ぶ意欲がないのに無理に勉強を強要するのは苦痛を与えるだけ。自ら学びたいという意識を育てるような指導を期待する。

地域ができることは、子どもへの声掛け、褒めてあげる、言葉による見守りなどがある。

他にもたくさんの意見をいただきました。参加いただいた皆さんに感謝申し上げます。委員会では、この会議で出された意見も受け止め政策に反映させていきます。